

今なお続けて行っている。

大荒神のお堂が中心になっている所から、この七班附近が中屋敷と呼ばれるようになったのではなからうかと思っている。

155 寺本の地名考

古文書の表書きには、必らず寺本四ヶ村と書いてあるが、その「寺本四ヶ村」とは、寺本太郎が支配していた堀之内村、廻間村、中島村、平井村を指していて、決して地名ではなく人名が冠せられたのである。

この寺本太郎の純系統の寺本恪氏の書簡を次ぎに掲載して参考に供する次第である。

寺本家が、和歌山県（紀州）西牟婁郡田辺町へ来るまでの推定。

先ず、森鷗外作の小冊（阿部一族へ昭和三十九年六月初に御教示されたもの）と、静岡県内、掛川城史と、日本史年表とを、つき合せながら拾って見る。

文禄元年（一五九二年）、豊臣秀吉は、朝鮮に出兵し、次に慶長二年（一五九七年）再度の出兵を行ったが、翌、慶長三年（一五九八年）病死、ために出征軍は引揚げた。寺本與左衛門が、加藤嘉明に従ってこの戦いに参加し、朝鮮に行っ

けたが、帰国しての話に、朝鮮宮廷の宝物の一つに、雁の香炉の片割れ（雌雄そろっていたもの）が残っているのを見たとのこと。この婦人には子どもは出来なかったと伝えられている。

與左衛門の子、八左衛門は、細川忠利に抱えられ、寛永十八年（一六四一年）忠利病死の時、切腹、殉死している。時に五十三才。わが家に伝わる話として、先祖の一人が、見事な切腹をした事を伝えている。それは、殿様が病床で、日頃大好物の鮎ずしを所望したので、至急手配したが、とうとう到着寸前に殿様の命は終わった。わが先祖の一人は、冥途にて主君に『すしの代食した事を話そう』と悠々としてその鮎ずしをたべ終って、腹を切ったというのである。この人が、或は、八左衛門の事ではなからうか。

私の父は、嘉永六年生れ。昭和九年二月、東京で死去。享年六十七才。廃藩置県になった明治四年頃、二十才前後で、それまで苦勞知らずに、風など揚げて遊んだという。その後三ヶ年の禄（禄高三百石）を一時にもらった。一家は、やがて、家老邸を引払って田辺町の北方を流れる会津川のほとりに水車小屋を求め、移り住んで、嫁をとり、一男三女をもった。

ところが、明治二十二年八月二十日、紀州全体を襲った大

たことになっているが、私が、父より聞いたのには、安藤帯刀について行ったとのこと。加藤嘉明というのは、安藤帯刀の上将だったように思われる。

安藤帯刀は、元和二年（一六一六年）掛川城主になり、元和五年（一六一九年）に、徳川頼宣（紀伊家）の家老になっている。頼宣は、徳川家康の第五男である。

何れにせよ、寺本與左衛門が、朝鮮に出かけた事に確証あり。それは、寺本家代々の菩提寺として、田辺に海蔵寺というお寺あり、寺本家の墓の少し離れた所に、代々高麗婆さんの墓と呼ばれている自然石の墓石あり、私も墓参りの時は、異様に思いながらおがんだもの。

與左衛門は、朝鮮で功を立てたと出ている所からして、攻略のついでに、朝鮮婦人を一人連れて帰国し、安藤帯刀の田辺藩主になった時、いっしょに、家老の一員としてこの地に足を留め、爾来、三百余年の寺本の田辺史が始まったのである。

この婦人は、かなり身分の高い人だったらしく、残る話として、耳飾りに黄金の環をさげていたこと。また、雁の香炉と称する（おそらく焼物？）宝を持参したこと。後に、明治四十三年（一九一一年）日韓合併頃、私の義理の伯父に当る郡役所勤めの人が、朝鮮へ役所の仕事の件で、出願して出か

台風、大洪水に見まわれ、その時、父は、母、嫁、子ども、合計五人を一挙に失い、單身わずかに命をとりとめて復活、新に後妻をめとり、生れたのが私たち姉弟、これまた一男三女。不思議というか、自然の配剤というか。この洪水で、寺本家伝来の家宝ともいふべきもの、系図等、由緒の色々、すべて流失。安永年間、有名だった画師、池野大雅も、かつてわが家に一ヶ月程滞在。その礼として、京都東山、西山の景観を金屏風に描き残したというものも、名刀の数々、鎧、五揃等々、それから例の雁の香炉も今も尚、川の、或は、海のどこかに埋まっている事でしょう。

尚、細かい思い出はありますが、今日はこれで失礼します。御質問あれば、またお知らせ下さい。

二月十二日

寺本 恪

加古文雄様

なお、寺本太郎の系図は、次のようになっている。

寺本太郎―左エ衛―右エ門佐―與左エ門―八左エ門直次

156 寺本の地名の由来

野間海道―源頼朝公が、父義朝公の法要をするために、通られたと言う道で、中島の権現堂より、同、光明寺附近ま